

トルコ共和国百年祭（2023年）のメディア・イベント

― 明治百年祭（1968年）との比較分析から ―

トパチョール・ハサン

1. はじめに

2013年5月28日、トルコでは大規模な反政府デモが発生した。このデモは宗教化をおし進めようとする政府の方針に対する反発がひきがねとなっている。詳細は次節に譲るが、トルコ共和国は元来、宗教の世俗化を国是として建国された。しかし、現在の政府はそれとは逆に宗教性の復権を唱えている。このような流れの中で、2023年、トルコ共和国百年祭イベントの開催が政府によって準備されている。1923年のトルコ共和国建国時の国是に反する方針を持った政府が、建国以来の百年を祝うことにはどこか矛盾した感覚がつきまとう。実際、トルコ国内でもマス・メディアにおいて少しずつ、賛否両論の議論が交わされ始めている。

過去に目を向ければ、日本でも1968年10月23日に、明治元年(1868)から一世紀がたったことを記念して、「明治百年祭」イベントが行われている。時期的に1964年の東京オリンピックと1970年の大阪万国博覧会の間にある「明治百年祭」イベントは、戦後日本の大きなメディア・イベントとして佐藤栄作内閣によって東京を中心に日本全国で開催された。

日本政府によって執り行われた「明治百年祭」には、日本人が過去の100年間で政治、経済、文化その他すべての面にわたってどのように奮闘努力を重ね、近代国家建設に向かってどのような歩みを遂げたかなど、近代化を肯定する歴史観を国民に共有させる目的があった。それは大衆社会化の中で拡散する国民アイデンティティを再統合するねらいもあった。それに対して、「明治百年祭は歴史の見方をゆがめ」、「過去の歴史を美化する」として、歴史学者、教育者などを中心に猛烈な反対運動も巻き起こった。政府の「明治百年祭」プロジェクトは、その賛成派と反対派の間で国民的歴史観をめぐる「記憶の内戦」を引き起こしたのである。

日本の百年祭イベントに見られるこうした「記憶の内戦」は国民統合や近代化をめぐる対立であったと考えられる。つまり、近代国家における百年祭イベントの在り方やそれに対する評価を考察することは、国民統合や近代化に対する政府の態度や国民世論を明らかにすることなのだ。

そこで本稿では、日本とトルコ両国の百年祭イベントを「近代化とメディア・イベント」の観点から比較分析することで両国にとっての近代化の意味の違いを明らかにすることを目的とする。具体的には「トルコ共和国百年祭」が持つ意味、現在トルコで行われている「トルコ共和国百年祭」イベントの準備などを紹介し、それを日本の「明治百年祭」が持った意味、「明治

百年祭」が行われた時期の日本と比較しながら検討する。以下ではまずトルコ共和国成立時の歴史を概観し、百年祭イベントがトルコにおいて持つ意味を明らかにする（2 節）。次に、トルコにおける百年祭の目的を明らかにしたうえで、イベントのために計画されているプロジェクトの例をいくつか挙げて「明治百年祭」のイベントと比較し、両者に見られる政府側の意図の相違を明らかにする（3 節）。さらに、百年祭に対して両国の様々なメディアで表れた反応、あるいは知識人の見方を比較しながら検討する（4 節）。最後に、「近代化とメディア・イベント」の関連で、両国の百年祭イベントが持つ意味の共通点と相違点をまとめる。

2. トルコ共和国の歴史と祝祭

トルコ共和国の樹立が宣言されたのは 1923 年 10 月 29 日であり、2023 年は 100 周年にあたる。オスマン帝国が終焉を迎え、トルコ共和国が樹立されるまでに様々な戦争または事件があり、そのうちのいくつかは現在、国民の祝日になっている。まずは、オスマン帝国の終焉からトルコ共和国の樹立までのプロセスとその中から現在国民の祝日になっている重要な事件について説明する。

第一次世界大戦で中欧同盟国に参加したオスマン帝国は敗北し、1918 年 10 月 30 日に連合国とムドロス休戦協定を締結した。それからオスマン帝国は連合国によって支配され、1920 年にセーヴル条約を締結してからオスマン帝国は広大な範囲の領土を失った。当時、オスマン帝国の軍人であったムスタファ・ケマル・アタチュルクはオスマン帝国の回復が不可能だと判断し、独立戦争を計画する。アタチュルクは 1919 年 5 月 15 日に船でイスタンブールからサムスン市に出発し、1919 年 5 月 19 日同地に到着した。そのため、5 月 19 日は独立戦争の開始日とされている。また、戦争後にアタチュルクがトルコの若者に捧げる日と宣言したため、1935 年から毎年 5 月 19 日は「アタチュルクを記念、青年とスポーツの日」として祝われ、トルコの各地で高校レベルのスポーツ大会が行われている。

独立戦争のために国民を結集し、連合国に勝利し続けたアタチュルクは、1920 年 4 月 23 日にアンカラ市（現在の首都）で国会を開き、オスマン帝国の存在を否定した。それに対して、オスマン帝国はアタチュルクを裏切り者として告発したが、連合国によって支配されているイスタンブールから命令を送るオスマン政府に対して、国民の多くは、アナトリアで敵と戦っているアタチュルクを支持した。戦後、アタチュルクはこの日を「トルコの未来である子供たち」に献辞したため、1935 年から毎年 4 月 23 日は「国家主権と子供の日」としてお祝いされ、全国の小・中学校では様々なイベントが行われている。

国民の信頼を得たアタチュルクは、連合国に勝ち続け、1922 年 8 月 30 日に戦争の転換点と言われる「デウムルプナル戦争」で勝利したため、連合国はアナトリアから撤退し始めた。この日は、1923 年から毎年「戦勝記念日」として祝われている。この戦いの後、アナトリアをほぼ掌握したアタチュルクはオスマン帝国を廃止し、1923 年 10 月 29 日にトルコ共和国の樹立を宣言した。この日はオスマン帝国の終焉、およびトルコ共和国建国の日として、1926 年から毎年一年間で最も大きなイベントとして全国で催されている。トルコ各地において事業・行事としてコンサート、演劇、展示会などが行われ、テレビではトルコ共和国が作られた独立戦争、革命を指導した「アタチュルク」についてのドキュメンタリー番組や 10 年記念日に特別に作詩

された「10 周年の頌歌」が流される。そして、様々な新聞や雑誌に独立戦争、アタチュルクについて記事が執筆される。特に、2023 年にはトルコ共和国百年祭が催されるため、大規模なイベントが立案され、準備がすでに始まっている。結局、10 月 29 日は封建的なスルタン制度の終わりとトルコの近代化の始まりを意味しているわけだ。そのほか、世界各地で共通の「元日」と「メーデー」、また、宗教的な祝日である「ラマダン祭」や「クルバン祭（犠牲祭）」は現在でも国民の祝日とされている¹。しかし、この中で国家イベントとして国民が最も盛り上がるのは 10 月 29 日であるため、2023 年には「トルコ共和国百年祭」として空前の国家イベントが期待できる。

3. 「トルコ共和国百年祭」が持つ意味と政府の意図

「トルコ共和国百年祭」が持つ意義は、イベントが行われる予定の 10 月 29 日という日取りによく表れている。これは、前節でも述べた 1918 年 10 月 30 日にオスマン帝国が連合国と締結したムドロス休戦協定と関係がある。オスマン帝国は 1918 年 10 月 27 日から 29 日の夜まで連合国との会議に参加し、30 日にムドロス休戦協定を締結した。その後、連合国は占領をはじめ、オスマン帝国は敗北を認めた。つまり、1918 年 10 月 30 日のムドロス休戦協定は連合国に対しての敗北、そしてオスマン帝国の無抵抗を意味していた。

トルコ共和国の樹立日を 1923 年 10 月 29 日に決定したアタチュルクの意図についてトルコ・オスマンガジ大学教授のメティン・カレによれば、「アタチュルクは独立戦争中にトルコの将来について考え、エルズルム総会では『今の封建的な制度は我国を近代化させ、国民を幸せにさせるような制度ではないのが明らかである。新しいシステムを探す必要がある』と述べている。そして、1919 年 7 月 23 日に『独立戦争の勝利後、新トルコのシステムは共和国にする』と言っている」という。さらにトルコ共和国が樹立された 2 年後の 1925 年 10 月に、独立戦争で重要な活躍をした司令官の一人であるファフレッティン・アルタイがアタチュルクに 10 月 29 日を選んだ理由を聞いた時、アタチュルクは次のように述べた。

1918 年 10 月 30 日は我国の土地が占領され、オスマン帝国が無抵抗を認め、そして国民が希望を失った日を意味していた。あれから 5 年後、国民と一緒に戦って、国民と一緒に祖国を取り戻したのが 1923 年 10 月 29 日。〈略〉これを歴史上から消されようとされた一つの民族のリベンジとして考えた方が良い²

以上のことから明らかなように、トルコの百年祭が開催される 10 月 29 日はトルコを占領した連合国とそれに対して無抵抗のオスマン帝国に対する批判の意味があると同時に封建的な制度を廃止し、独立を得たトルコを将来近代化させるために選ばれた新たなシステムの採用を意味するものである。言い換えれば、この日はオスマン帝国の封建的な制度を廃し、近代国家建設に至るために新たな道を歩き始めてから百年たったことを意味するのである。なお、イベントが行われる予定の 10 月 29 日という日付をめぐって現在（2014 年）のところ批判的な議論は確認できない。

一方、日本の場合は、「明治百年祭」の式典実施日の決定のために、1966 年 5 月 11 日に第一

回会議が行われた。『明治百年記念行事等記録』（1969）によると、明治百年の起点として、①明治天皇践祚（慶応 3.1.9）、②大政奉還勅許（慶応 3.10.15）、③王政復古の大号令（慶応 3.12.9）、④五箇条の御誓文（慶応 4.3.14）、⑤明治天皇即位の大礼（慶応 4.8.27）、⑥明治改元（明治元 9.8）等の諸説があったが、国際慣例（新暦満年）、季節、分り易さその他の観点から最も適当なものとして⑥明治改元の新暦日選ばれた。そして、明治改元の布告された慶応 4 年あらため明治改元の 9 月 8 日から数えて満 100 年になる 1968 年 10 月 23 日が、式典実施日として決定されたという³。

では、百年祭開催にあたって、トルコと日本の政府がそれぞれどのような意図を持っていた（あるいは持っている）のだろうか。両国の百年祭イベントに政府が込めた意味を検討してみると、その最も大きな違いはスポットをあてている時間軸にあることが分かる。「トルコ共和国百年祭」の場合、現在はまだ政府の正式な発表がないが、2023 年までに準備を完了させ、百年祭を祝う時間開会式が予定されている大きなプロジェクトには「過去」だけではなく、「現在」または「未来」のイメージが主張されているものが多い。それに対して日本の「明治百年祭」では、日本の百年間の近代化の歩みを国民に理解させる目的で「過去」が強調されている。つまり、結論から言えば、トルコの政府が「トルコ共和国百年祭」イベントを通してトルコの「過去」、「現在」、「未来」すべてを考えさせる目的を持っていたのに対して、日本の政府は「明治百年祭」を通して国民に歴史を共有させることに重点をおいていたのである。以下では、具体的なプロジェクトに触れながら、このことを論じてみたい。

現在トルコの与党である公正発展党（AKP）⁴は、2011 年から「トルコ共和国百年祭」イベントの計画に着手している。与党のホームページにある「2023 年の目標」をみると、2023 年までに達成を目指す事項が 30 のタイトルに分けて、説明されている⁵。本稿で紹介するその大きなプロジェクトの一つ目は「1 万キロ新幹線」プロジェクトである。2014 年 7 月 24 日、正式に始動した新幹線は現在（2014 年）首都のアンカラからイスタンブールまで（533 k m）であり、トルコの最も大きな 2 つの都市を繋げている。これを 2015 年末に 3 千 5 百キロ、2019 年末に 6 千 5 百キロ、そして 2023 年までには、1 万キロに拡張することが計画されている⁶。

新幹線が開通した時にトルコの首相であったレジェップ・タイイップ・エルドアン（2014 年 8 月 28 日に大統領に選出された）は、新幹線の開通式で、アタチュルク時代に作られた鉄道線はアタチュルク時代が終わってからそのまま、長らく拡大されずに利用されてきたことに言及し、その古い鉄道線を更新してきた上で、新幹線も開通させたことを指摘した。そして、2023 年までに新幹線を 1 万キロにして、トルコをさらに近代化させると宣言した⁷。ここではアタチュルク時代（過去）、新幹線の開業（現在）と一万キロの新幹線（未来）のすべてが主張されている。さらに、近代国家建設に至るという目的に向かって、2023 年の百年祭が注目され、百年祭イベントに近代化のイメージが与えられている。

ちなみに「明治百年祭」イベントの内容を検討してみると、新幹線に関するものは確認できない。しかし、鉄道自体には日本の高度経済成長期に近代化の象徴として意味が与えられていたことが分かる。例えば『読売新聞』（1959 年 5 月 3 日）は、通勤電車が 100 車増加されることを「国鉄の近代化」とみなしている⁸。この点は現在（2014 年）トルコが新幹線に付与している位置づけと類似している。しかし、同じ位置づけのものが、日本の百年祭には含まれてい

ないのである。

また、「イスタンブール第3空港」プロジェクトも、トルコの近代化の象徴というイメージが与えられている。2013年に土地買収と建設業者の決定が完了し、2014年から建設が開始されている。空港の乗客定員が年間1億5千万人として計画され、ヨーロッパの最も大きな旅客機センターになることが目標とされている。空港の起工式ではトルコの運輸大臣であるルティフ・エルワンは、トルコの経済成長と共に空港を利用する人々の数が増加したことを指摘した上で、現在イスタンブールにあるアタチュルク空港とサビハ・ギョクチェン空港が期待を満たしていないと主張した。そして、当時のエルドアン首相は、空港を段階的に建設し、2017年10月29日に第一部分の開会式が行われることを報告した。彼は起工式をトルコ国民とトルコの未来のための「歴史的瞬間」として語り、「世界最大の収容可能数の空港を建設することで、イスタンブールは国際交流の中核になる。その上、本空港によってトルコの貿易及び経済成長が増加し、トルコの近代化も実現できる⁹」と述べ、未来のトルコを世界の中心にある国として描いている。つまり、「トルコ共和国百年祭」の重点プロジェクトである「イスタンブール第3空港」はトルコの近代化の中の「未来」を意味するものとして報告されているのである。

日本の場合も近代化のイメージを持って計画されたのは成田国際空港である。東京オリンピック（1964）や明治百年祭（1968）、大阪万国博覧会（1970）と時を同じくして、当時の空港が期待される需要を満たす水準に至っていないと判断され、新東京国際空港の建設が承認された¹⁰。当時、羽田空港の拡大も話題になっていたが、『*World Skygate Narita*』（2012年）によれば、「①羽田空港の沖合に拡張した場合、東京港の港湾計画との調整が極めて難しい。②仮に拡張できたとしても、空港の処理能力は20%-30%程度の増加に留まる」¹¹などの理由から羽田空港の拡張のみでは長期的航空機輸送需要に対応できないことが明らかにされた。これはまた、「イスタンブール第3空港」がトルコの近代化の中で持つ意味と同様のものが目指されていたということを示している。しかし、日本の場合、成田空港「明治百年祭」とはなんら関連付けられることはなかった。

本稿で紹介する最後のプロジェクトは、現在トルコで最も話題になり、日本のメディアでも取り上げられたものである。それは、日本の三菱重工業を中心とした「原子力発電所設立」プロジェクトである。そのために、安倍晋三首相がトルコに訪問し、トルコ共和国90周年であった2013年10月29日に「日本国とトルコ共和国の原子力エネルギー及び科学技術分野における協力に関する共同宣言」が両国首脳の間で確認された¹²。また、もう1ヶ所の「原子力発電所設立」はロシアが担当することが決定している。「原子力発電所設立」について当時のエルドアン首相は「原子力発電所の設立が出来たら現在輸入しているエネルギーの2/3は自分達で作れるようになる」と述べ¹³、それはトルコの経済的発展のために非常に大切なものであること、トルコの経済発展と近代化にも繋がっていることを主張した。つまり、原子力発電所もトルコの近代化のイメージを体現しているのである。

日本が原子力発電所を設立したのも「明治百年祭」が行われた60年代のことである。すなわち、日本初の商業用黒鉛炉原子力発電所である東海発電所は1966年に設立された。さらに、日本最初の軽水炉で、商用炉として最初に発電を開始した敦賀発電所が設立されたのは1970年である。しかし、同時期であるにもかかわらず、原子力発電が「明治百年祭」に関連付けて言及

された形跡はない。

以上のように、日本の新幹線や空港建設は「明治百年祭」イベントと直接関連づけられることはなかった。日本の場合、新幹線や空港建設に代表される工業化のイメージと結びついたのは「東京オリンピック」であった。したがって、「東京オリンピック」は日本の近代化の「現在」を意味するイベントだと言われるだろう。トルコの場合、新幹線や「イスタンブール第3空港」はトルコの工業化の象徴として紹介されている。その意味で、「共和国百年祭」は歴史にスポットを当て、「過去」を意味するイベントでありながらも、近代化の「現在」あるいは「未来」を意味するものとして考えられる。トルコの百年祭は日本のそれと比較して、「現在」や「未来」を含むより広範囲の時間軸を考慮に入れて構想されているといえるだろう。

最後に日本の「明治百年祭」を構想するにあたって、政府側の念頭にあったプランの概要を以下に示しておきたい。基本理念『明治百年祭』をどのように祝うか』に関して、1966年11月2日に行われた第三回会議において次の五点が決定されている¹⁴。

第一点目は、明治改元以降百年の日本の歴史の位置づけについて示したもので、明治以降の百年が「世界史にも類例を見ぬ飛躍と高揚の時代」であったと評価している。二点目として、近代化の歩みを評価しつつ「この百年間」は、「世界を鼓舞した壮挙もあれば、顧みてたどすべきこともないとは言えなかった」時代であるとしている。三点目として、日本の現状についての認識が述べられている。それは、明治以降の「欧米に追いつき、追い抜く」という近代化の歩みも「ある程度までは達成され」、いまや、「発展途上にある隣邦友邦諸国から指導と援助を求められる立場にもなっている」という判断である。四点目では、このような内外の諸情勢と日本の国際的地位の変化に対応する「次の日本の担い手である若い世代」への期待が述べられている。五点目として、「過去の事績を顧みるにとどまらず、その遺産である経験と教訓を現代に生かし、国際的視野のもとに新世紀への歩みを正しくかつ確固としたもの」とするため明治百年を記念し祝うのだと、「明治百年祭」開催の目的を説明している。

以上の基本理念からも明らかなように、「明治百年祭」イベントは日本国民に日本の近代化を理解させる上で、過去の記憶を想起させる目的があった。佐藤栄作内閣は、日本が近代国家建設に至るまで、日本の歩んで来た道を肯定的に示し、先人の努力に感謝するよう「過去」にスポットを当てたのである。

日本の百年祭が過去に特化した理由は、当時の日本で開催された他のイベントとの関連性によって説明できる。「明治百年祭」について、佐藤卓己は『物語 岩波書店百年史 2「教育」の時代』（2013）で次のように論じている。「この『明治百年祭』は1964年東京オリンピック大会と1970年大阪万国博覧会の間に位置する国家イベントである。東京オリンピックが戦後復興の『現在』を実感させ、大阪万博が高度情報化の『未来』を幻視させたとすれば、1968年の「明治百年祭」は日本近代の『過去』を取り戻す国家イベントだったといえるだろう」¹⁵。その上で、「東京オリンピック＝現在」、「大阪万博＝未来」、「明治百年祭＝過去」のメッセージを持っていたことを指摘する。ここから考えれば、先に述べたように「現在・過去・未来」という時間軸全てにスポットを当てている「トルコ共和国百年祭」は、日本で1960年代から70年にかけて開催されたオリンピック、万博、百年祭という3つの国家イベントをすべて包含した意義を持つ一大イベントだといえるだろう。

4. 「トルコ共和国百年祭」と「明治百年祭」に対するメディアの反応

日本の「明治百年祭」について 46 年後の現在（2014 年）から振り返ってみると、明治時代を回顧するものとして作られた、『坂の上の雲』、『天皇の世紀』のような連載小説、テレビドラマ『竜馬がゆく』、映画など日本国民の歴史観に影響を与えたものが多数あるにもかかわらず、イベントは政府の意図したとおりには進まなかった¹⁶。

一方、2023 年 10 月 29 日に予定されている「トルコ共和国百年祭」のための準備会議はまだ設立されていない。以上で紹介してきたような大きなプロジェクトが進められているものの、具体的にどのようなイベントが行われるのか、また全国各地で行なわれるのか、それとも一つの中心的都市で行なわれるのかなども未確定である。日本の場合、佐藤栄作内閣は 1966 年 3 月 25 日、二年後に開催する「明治百年記念事業」計画を閣議決定した¹⁷。また、閣議決定の線に沿い、明治百年記念行事を全国民的規模において実施するよう記念式典実施の時期その他の記念行事の内容や実施方法等に関し各界の意見を聞くため、1966 年 4 月 15 日にも準備会議が開かれた。つまり、「明治百年祭」イベントの正式な準備作業が始まったのはイベントの 2 年前からである。その意味で 2023 年までまだ 9 年あるという事実も含め、「トルコ共和国百年祭準備会議」がまだ開始されていないことは不自然なことではないと言えるだろう。

しかし、2023 年までまだ 9 年あるものの、トルコのメディアでは以上で紹介してきたプロジェクトに関して批判も散見できる。それはまだ反対運動というレベルではないが、イベントが近づいてくると反対の声が大きくなると推測される。従って以下では、その反対の声の概観をしつつ、「明治百年祭」反対運動と比較する。その上で、両国の百年祭イベントに対する反対運動の共通点と相違点について述べる。

批判されている第一のプロジェクトは「イスタンブール第 3 空港」である。エコロジーに関心を持つ学者、またはジャーナリストによって厳しく批判されているが、それは、空港の建設によって非常に広範囲にわたって森の木を切る必要があり、それはイスタンブールの生態系に悪い影響を与えるおそれがあるという理由からである¹⁸。こうした批判はあくまで建設場所に対する批判であって、空港が建設されること自体に対する反対ではない。しかし、このような意見は運動と言えるレベルにはなっておらず、国民の猛烈なデモなどは見られない。

しかし、本稿の課題にとっては、それ以上に空港のデザインとそれが持つ意味への批判が重要である。「イスタンブール第 3 空港」は世界最大の空港としてトルコの近代化のシンボルを担うことになるが、空港のデザインは、オスマン帝国時代に建築されたセリミエ・モスクに基づいている。つまり、空港が完了すると、空からオスマン帝国が建築したモスクのように見えるわけである¹⁹。ここで示されている「過去」のイメージはトルコ共和国の樹立が宣言されてからの百年ではなく、その前のオスマン帝国のイメージである。しかし、既述のように 2023 年 10 月 29 日は、オスマン帝国の封建的な制度の廃止の延長線上にある。近代化の象徴を持つ百年祭のプロジェクトにオスマン帝国のイメージを付け加えることは、トルコ共和国の百年という「過去」ではなく、それ以前のオスマン帝国時代の「過去」を近代化と接合させるのであり、オスマン帝国のイメージを強化することになるのである。このような文脈において、「エルドアン首相はネオ・オスマン主義のビジョンを持っている」²⁰という批判がある。

また、「トルコ共和国百年祭」イベントに直接関係しないが、エルドアンが大統領に選ばれる前に会談をおこなったのは、オスマン帝国によって支配されていた国々の指導者たちである。その国々でのエルドアンのスピーチに対して次のような批判がある。

「(略) エルドアン氏は2023年についてよく発言している。しかし、海外でのスピーチを聞いてから、それはただ単にトルコの過去百年の話ではなく、オスマン帝国のイメージを再現する目的があることが分かった²¹。」

そして、アラブ半島の国でのスピーチはトルコの将来の大統領というよりも、アラブ世界の新たなリーダー、ある意味新たなスルタンのようなイメージを与えることが懸念されている。

「トルコ共和国百年祭」のために計画されているもう一つの大きなプロジェクトは「イスタンブール運河」である。これは、イスタンブールの近くに黒海とマルマラ海を繋ぐ人工の運河を建造するものであり、トルコの貿易発展に大きな貢献をするものとして報告されている²²。これに対してエコロジストが自然のバランスが壊れることに関して批判を述べている。しかし、それよりも目に付くのは、本プロジェクトのメディアでの表れ方である。トルコ最大の発行部数を誇る日刊紙『*Sabah* (朝日)』(2012)では、「オスマン帝国時代のクレイジーなプロジェクトが次々に実現されている」²³というタイトルで歴史研究者であるテウラン・シャヒンのこのプロジェクトについての記事が紹介されている。なるほど、当プロジェクトはオスマン帝国時代に夢として思い描かれ、現在エルドアン大統領がその夢を実現しているものであると主張されている。つまり、空港プロジェクトと同様、「イスタンブール運河」プロジェクトにもトルコの近代化の百年にあたる近い過去ではなく、オスマン帝国時代という遠い過去のイメージが強く含まれているのだ。また、直接「トルコ共和国百年祭」と関係しないが、共和国の樹立が宣言されてから使用されなくなったオスマン帝国の国章を復活する法律提案を準備する²⁴など与党の動きが続いている。

これまで述べてきたことをまとめると、正式にどのようなイベントが企画されているかは現在まだ確定できないものの、近代化のイメージを国民に与えるために企画されているプロジェクトの裏側で、トルコ共和国の過去百年の「文明」イメージよりもオスマン帝国時代の「文化」イメージ、つまりスルタン制度の伝統が利用されている。それに対して、現在はまだ明確な反対運動に成長していないが、政府のこの試みに対して「オスマン帝国のイメージを強化している」という批判が多少現れている。ただし、9年後という長いスパンで構想されたプロジェクトであるため、いまだ百年祭と関連付けて報道するメディアはほとんどないのが現状である。今後トルコで展開される批判を占う意味でも、日本の「明治百年祭」に対して展開された批判に目をむけておきたい。例えば、歴史家の大江志乃夫は「"明治百年"の意味するもの--近代日本の争点(座談会)-I-」(1966)で次のように批判している。

「政府の考え方は、要するに近代百年の歴史の起点を天皇と結びつけただけの話ですね。これは近代日本の歴史を天皇政権の歴史と見て、その天皇政権が現在まで続いているのだから、明治維新変革百年記念ではなく、『明治百年』としてとらえる。こういう考え方が根本的にいけないだろう」²⁵。「明治百年祭」イベントの日付の決め方から見ても天皇制を強化する傾向があることはまちがいない。

過去を賛美するイベントに対するこのような批判はトルコでも今後、現れてくる可能性は十

分ある。ただし、ここで批判の対象になっている「過去」はトルコのそれとはやや異なるものである。

前章で述べたように、日本の場合、1968 年 10 月 23 日に日本武道館で開催され、日本政府によって執り行われた「明治百年祭」には、日本人が過去の 100 年間で政治、経済、文化その他すべての面にわたってどのように奮闘努力を重ね、近代国家建設に向かってどのような歩みを遂げたかなど、近代化を肯定する歴史観を国民に共有させる目的があった。それは大衆社会化の中で拡散する国民アイデンティティを再統合するねらいでもあった。つまり、日本の百年間の近代化を国民に理解させるために明治から現在という「過去」にスポットを当てたのである。それに対して、トルコの百年祭は実質的に百年前の共和国建国以前のオスマン帝国に根差した要素を多分に含んでいるのだ。この点はこれからメディアで取り上げられるだろう。

では、日本においては、「過去」のどの部分が具体的に批判の対象になったのだろうか。日本のメディアの反応は様々であり、同じ新聞においても賛成の記事と反対の記事があったが、それよりも知識人、特に歴史学者の反対運動が強かった。日本史研究会は『「明治百年祭」に対する日本史研究会の態度』（1968）で「明治百年祭」イベントに関して次のような声明を出している。「われわれは、日本国民の一員として、また、とりわけ歴史学の研究、教育、普及にたずさわるものとして、この政府の主唱する記念行事に賛意を表することはできない。なぜなら、この企画は、記念すべき対象を意識的にすりかえており、そして、その取り替えられた対象を国民に祝わせようとする企画者たちの意図に、極めて危険なものがあると判断されるからです」²⁶。そして、『「明治百年」』という言葉が示しているように、企画者たちは、明治維新の社会変革・国家体制の転覆というもっとも目覚ましい面には全く目をおおい、その後の近代百年のみをとりあげて、これを祝賀しようとしている」と述べ、「だが、われわれの見解によれば、日本の近代百年の歴史はそのような一面的な賛美を受けるべき性質のものではない」²⁷と指摘している。「一面的に賛美を受ける」べきではないと発言している知識人の念頭に第二次世界大戦があったことは言うまでもない。このイベントの評価が知識人にとって「危険」なものとして見られ、「国家主義、軍国主義」を高めるような傾向として認識された結果、反対運動が始まったのである。

トルコの現在の政府はアタチュルク没後、現政権が生まれるまでの「近代化」や軍隊について批判的に見る傾向が強い。一方、上記のように丸山眞男に代表される日本の進歩的知識人は、戦前戦中の国家主義、軍国主義の高揚を「近代化の挫折」と位置づけていた。百年祭に対する評価は「近代化」という言葉に深く関連する。しかし、「近代化」の指し示す内実がどこにあるかは状況によって異なってくるのである。つまり百年祭の評価はその近代化を工業化(西洋化)と捉えるか民主化と捉えるかによって大きく評価が分かれる。現在のトルコ政府は近代化を工業化として捉え、民主化に対して否定的である。だから、「共和国百年祭」イベントにその近代化＝工業化のイメージを与えようとする一方、そこで持ち出されてくる歴史は、共和国以前のものであり、トルコが最も強かったオスマン帝国時代である。

5. おわりに

本稿ではトルコの百年祭と日本の百年祭を比較しつつ論じてきた。2 つの「百年祭」は一定

の類似性を持ちながらも、対象とする時間軸や「近代化」という言葉の意味において、異なっていた。つまり、「近代化」を工業化と解釈するか民主化と解釈するか、という力点のおきかたの違いを顕在化させてきた。トルコ百年祭では、近代化が前者の意味として語られ、日本の「明治百年祭」では近代化を後者の意味として捉える動きがあった。

まとめると、「トルコ共和国百年祭」の正式なイベント内容はまだ発表されていないが、2023年までに実現しようとしている大きなプロジェクトが多数ある。各プロジェクトによって政府が付与している意味は異なり、「過去」、「現在」、「未来」のすべてが見られる。そしてすべてのイベントに、トルコの近代化をトルコ国民に理解させる目的があり、トルコのメディアではこれに対する批判が少なく、その上で、国民もメディアも一定の盛り上がりを見せている。しかし、政府が様々なプロジェクトを通してトルコの近代化を「過去」と結合させようとする際の「過去」イメージに対しては批判が見られる。それは、政府が過去百年の民主化（世俗化）イメージよりもその前のオスマン帝国の宗教的伝統を、このプロジェクトを通して国民に浸透させようとしているためだ。つまり、オスマン帝国の終焉、トルコ共和国の樹立を意味するはずのメディア・イベントを用いて政府が裏側でオスマン帝国の伝統的イメージを強化しようとすることに対する批判である。

日本の「明治百年祭」の場合、佐藤栄作内閣によって行われたイベントは「過去」にもっばらスポットを当てていた。これに対して、トルコの百年祭は現在・過去・未来の全てにスポットをあてようとしている。その背景には、「東京オリンピック（1964）」、「明治百年祭（1968）」、「大阪万国博覧会（1970）」という大きなメディア・イベントが三点セットになっていた1960年代の日本とは異なるトルコの状況がある。トルコは2020年のオリンピックや同年の万国博覧会にエントリーしていたが、オリンピックの主催地は東京に、万博の開催地はドバイに決まったため、大きなメディア・イベントとして手元にあるのが「トルコ共和国百年祭」だけである。つまり、日本のようにイベントごとに「過去」、「現在」、「未来」をそれぞれふり分け、国民に近代化を理解させるという機会がトルコにないため、「トルコ共和国百年祭」という一つのイベントにすべての意味を含めようとしているわけである。

「近代化」という言葉によってひとくくりにされたトルコ共和国の現在・過去・未来という時間軸の中には、共和国以前の古いシンボルが忍び込んでいる。トルコ共和国という近代国家の底流に、オスマン・トルコという「神話」が存在することが、「トルコ共和国百年祭」によってますます顕在化する。しかし、トルコ共和国の「近代化」の歩みは西洋化である。「共和国百年祭」イベントを通じて、「強い国」のイメージを作ろうとしているトルコは、その歴史上もっとも強大な時期にあたるオスマン帝国時代にスポットを当てている。つまり、国家の強大さを表す時にはオスマン帝国のイメージが利用されるのである。しかし、トルコの近代化の実態が西洋化であるから、西洋化のイメージとオスマン帝国のイメージの間で齟齬が生まれるのである。

注

¹ “Public Holidays in Turkey,” <http://www.goturkeytourism.com/planning-holiday/public-holidays.html>（最終アクセス日・2014 年 8 月 24 日）。

New Year's Day	1 January
Children's Day	23 April
Labour Day	1 May
Youth & Sports Day	19 May
Victory Day	30 August
Republic Day	29 October
Ramadan Festival	29-30-31 July
Feast of Sacrifice	5-6-7-8 October

² 「Tarihin Sırrı ve 29 Ekim' in Gizemi」 *Hurriyet*, <http://www.hurriyet.com.tr/gundem/19129868.asp>（最終アクセス日・2014 年 8 月 25 日）。

³ 内閣総理大臣官房(1969)『明治百年記念行事等記録』19－20 頁。

⁴ 公正発展党 (Adalet ve Kalkinma Partisi <AKP>) <http://www.akparti.org.tr/english>（最終アクセス日・2014 年 8 月 5 日）。

⁵ トルコ共和国百年祭における AKP (公正発展党) の目標
<http://www.akparti.org.tr/site/hedefler>（最終アクセス日・2014 年 04 月 18 日）。

⁶ トルコの新幹線計画図 <http://www.tcdd.gov.tr/upload/Files/ContentFiles/2010/harita/TR-M-S-001.jpg>（最終アクセス日・2014 年 8 月 20 日）。



⁷ “Erdoğan Yüksek Hızlı Tren açılışında konuştu!” <http://www.son.tv/haber-273507>（最終アクセス日・2014 年 8 月 20 日）。

⁸ 『読売新聞』（1959 年 5 月 3 日）朝刊、9/18 頁。

⁹ “Turkish Prime Minister Erdoğan's 'Crazy Project' for Istanbul: Building a Second Strait” <http://www.treehugger.com/corporate-responsibility/turkish-prime-minister-erdoayans-crazy-project-for-istanbul-building-a-second-strait.html>（最終アクセス日・2014 年 8 月 10 日）。

¹⁰ 「東京国際空港の建設」
<http://www.mlitt.go.jp/hakusyo/transport/shouwa40/ind110303/004.html>（最終アクセス日・2014 年 8 月 15 日）。

¹¹ 「成田空港開港の経緯」『World Skygate Narita』
http://www.naa.jp/jp/issue/yakuwarigenjyo/2012/pdf/4_01.pdf（最終アクセス日・2014 年 9 月 1 日）

¹² 「トルコ原発受注、三菱重工など正式合意 安倍首相、輸出推進を強調」

- <http://sankei.jp.msn.com/politics/news/131030/plc13103021310014-nl.htm> (最終アクセス日・2014年8月10日)。
- ¹³ “Nukleer santral gerekli mi?” (原子力発電所は必要なのか)
<http://www.milliyet.com.tr/nukleer-santral-gerekli-mi-/ekonomi/ekonomiyazardetay/06.02.2012/1498499/default.htm> (最終アクセス日・2014年8月10日)。
- ¹⁴ 内閣 (1968) 『明治百年記念関係行事等概況』内閣総理大臣官房、4頁。
- ¹⁵ 佐藤卓己 (2013) 『物語 岩波書店百年史 2 「教育」の時代』岩波書店、360頁。
- ¹⁶ 詳しくは別項「明治百年祭 (1968年) と今日とイメージの確立」を用意している。
- ¹⁷ 同上、359頁。
- ¹⁸ N. Emrah Aydınolat (2013) 『İSTANBUL SON AĞAÇ HAVALİMANI—İstanbul’un 3. havalimanı hakkında bilmeniz gerekenler!』Tepav
http://www.tepav.org.tr/upload/files/1368539971-1.Istanbul_Son_Agac_Havalimani_Istanbul_un_3_havalimani_hakkinda_bilmeniz_gerekenler_.pdf (最終アクセス日・2014年8月10日)。
- ¹⁹ “İşte İstanbul’un 3. Havalimanı” (イスタンブール第3の空港について)
http://www.zaman.com.tr/ekonomi_iste-istanbulun-3-havalimani_1298953.html (最終アクセス日・2014年8月16日)。
- ²⁰ “Tayyip’in ‘Yeni Osmanlı’ vizyonu antiemperyalist olabilir mi?” (エルドアン氏の「ネオ・オスマン」ビジョンが反帝国主義者なのか) <http://www.turksolu.com.tr/339/erdem339.htm> (最終アクセス日・2014年8月10日)。
- ²¹ “Neo Osmanlı döneminin egzersiz çalışması” (ネオ・オスマン時代の練習)
<http://www.haber7.com/yazarlar/reha-muhtar/1175546-neo-osmanli-doneminin-egzersiz-calismasi> (最終アクセス日・2014年8月15日)。
- ²² “Turkish Prime Minister Erdoğan’s ‘Crazy Project’ for Istanbul: Building a Second Strait” <http://www.treehugger.com/corporate-responsibility/turkish-prime-minister-erdoayans-crazy-project-for-istanbul-building-a-second-strait.html> (最終アクセス日・2014年8月10日)。
- ²³ “Osmanlı’nın ‘çılgın’ projeleri hayat buluyor” (オスマン帝国時代のクレイジーなプロジェクトが次々に実現されている) <http://www.sabah.com.tr/gundem/2012/05/29/osmanlinin-cilgin-projeleri-hayat-buluyor> (最終アクセス日・2014年8月15日)。
- ²⁴ “Akp’den ‘Osmanlı arması’ için yasa teklifi” (AKPからオスマン帝国章の提案)
<http://haber.sol.org.tr/devlet-ve-siyaset/akpden-osmanli-armasi-icin-yasa-teklifi-haberi-96042> (最終アクセス日・2014年8月10日)。
- ²⁵ 大江志乃夫 [他] (1966) 「“明治百年”の意味するもの—近代日本の争点(座談会)-1-」『エコノミスト』(44)23、33-47頁、1966-06。
- ²⁶ 日本史研究会 (1968) 『明治百年祭』に対する日本史研究会の態度『日本史研究』、93頁。
- ²⁷ 同上、94頁。

(生涯教育学講座 博士後期課程1回生)

(受稿2014年9月1日、改稿2014年11月20日、受理2014年12月26日)

トルコ共和国百年祭（2023 年）のメディア・イベント

—明治百年祭（1968 年）との比較分析から—

トパチオール・ハサン

2023 年 10 月 29 日は、トルコ共和国の樹立から 100 年になる。オスマン帝国が終焉を迎え、トルコ共和国が樹立されるまでに様々な戦争または事件があり、その内のいくつかは現在国民の祝日になっている。その中で最も重要視されているのが 10 月 29 日であり、2023 年に盛大な「トルコ共和国百年祭」イベントが準備されている。現在は政府によるイベントの正式発表がないが、2023 年のためにトルコの近代化の象徴として企画されているプロジェクトがいくつかある。本研究は「トルコ共和国百年祭」のために計画されているプロジェクトを紹介しつつ、それはトルコ国民にとって何を意味するのかを説明し、トルコ近代化の歩みを百年祭イベントを通して明らかにすることを目的としている。そのために日本の「明治百年祭」と比較しながら、両国の百年祭イベントの意味と近代化に与えているイメージを明らかにする。

Turkish Republic Centennial (2023) as a Media Event: A Comparative Analysis with the Meiji Centennial (1968)

TOPACOGLU HASAN

After The Ottoman Empire lost in World War I and collapsed between the years 1918-1920, a large part of Anatolia was occupied by The Western Allies. Under the leadership of Mustafa Kemal Atatürk, Turkey started its War of Independence and as a result the Turkish Republic was founded in 1923. This was the end of the Ottoman Feudal System and the start of the Democratic System in Turkey. The Turkish Republic will celebrate its centennial in 2023. Even though the current government (Justice and Development Party) has not announced any official event plans, a number of ongoing projects have been announced to be finished by 2023, and will be a symbol of Turkish modernization on its centennial. This paper focuses on the upcoming centennial and introduces current ongoing projects planned for 2023. It also aims to clarify what this media event means for Turkey's modernization and the standpoint of the present government. By discussing the differences between The Meiji Centennial and The Turkish Republic Centennial in content and in the reaction of the mass media, this study examines the perception of modernization through centennial anniversaries in Turkey and Japan.

キーワード：「トルコ共和国百年祭」、「明治百年祭」、近代化、マス・メディア

Keywords: Turkish Republic Centennial, Meiji Centennial, Modernization, Mass Media

